

# 『医心方』の伝写について (IX)

— 仁和寺本 —

杉立義一

『医心方』仁和寺本がはじめて記録にあらわれるのは、『本朝書籍目録』（永正二年）の医書の部においてであり、『医心方三十巻・丹波雅忠撰或康頼撰』と出ている。ついで寛政三年、將軍家齊の請により幕府に貸出されて、多紀元惠らが筆写した。この時仁和寺本は巻名明示のもの、不明瞭のもの合わせて二二包あった。また天保十三年小島尚質が仁和寺で閲覧した時も同数であった。しかし昭和二十七年国宝指定の際は、巻一・五・七・九・十の五巻のみが残存していたにすぎず、現在も同じである。

仁和寺本は影印版（昭和十二年）も刊行され、また屢々展観されているが、改めて仔細に検すると、半井家本に比して多くの点において差異を認める。

## 一 現状

体裁：冊子本であり、とくに粘葉装である。半井家本は巻二十八以外は卷子である。

料紙：雁皮紙（鳥子紙）、半井家本は楮紙。

首尾：現存五巻のうち首尾ともに完全なものはない。

条文の配列：各条毎に行を改め、薬方はさらに改行して一字下げて記してあるため、判読しやすい。半井家本では連続して書かれている巻が多い。

書体・書風：全巻を通じて楷書ではあるがやや行書に近い書体もある。半井家本に比して力強さに欠けるが、和風化されたやさしさがある。巻一と巻七は同筆であり、やや細い線で流れるような優美な書風である。巻五と巻九は同筆でやや太い線で力強さがある。巻十はあまり力を入れない右上りの書風である。各巻はそれぞれほぼ一筆で書かれている。半井家本は巻二十五・二十九を除き、他巻は全般に力の入った楷書を主にしている。

仮名：院政期風の片カナを附している。半井家本にみる朱色の仮名はない。

訓点：朱点（オコト点）は全巻にある。しかし半井家本

には日野家流（藤原行盛）と丹波家流（丹波重基）の訓点があるが、仁和寺本には丹波家流のみといわれる。朱の色はきわめて鮮明。

返り点：半井家本にはレ点・一・二・三また上・下点があるが、仁和寺本ではわずかに一・二点がごく一部分にあるのみである。

注記：字句の説明・訂正や反切等の注はあるが、半井家本に多い比較の注はまったくない。

案語：今案云云として案語が全巻にある。その頻度およびその中の引用書目は半井家本と大差ない。

## 二 特記

經文の引用が半井家本には三ヶ所三種（最勝王經・南海伝・千手観音經）あるが、仁和寺本にはない。

巻九に押紙があり、書き忘れた条文を記している。半井家本にはこのような例はない。

半井家本に引用されている『聖恵方』（宋の淳化三年（九九二）刊）は、仁和寺本には引用していない。『医心方』安政刊本の札記には、十七巻の中に九〇七回の仁和寺

本との比較がでている。このことは仁和寺本といかに多くの差異点があるかを物語る。反面、仁和寺本は宇治本に近い。

## 三 伝来

元来、三十巻あったものが、五巻のみ残存しているのはなぜか。三年前小曾戸洋氏が、尊経閣文庫において、仁和寺本巻二十七の前半部（後半部は内閣文庫本・東博本として残る）を見出して本誌上に報告している。寛政三年の筆写前にもまたその後においても、このような例が他にもあったと考える。

最後に、仁和寺本を筆写したのは誰か。年代は何時か、またどのような経路を辿って仁和寺に入ったものであろうか。

（京都府京都市）